

Title	志賀の大わだ淀むとも
Author(s)	井村, 哲夫
Citation	語文. 1971, 29, p. 4-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68590">https://hdl.handle.net/11094/68590</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 志賀の大わだ淀むとも

井村哲夫

過三近江荒都二時柿本朝臣人麻呂作歌の反歌の二

(巻一・三一番)

ささなみの志我の一云比良の  
大わだよどむとも昔のひとにまたも会  
はめやも一云はむともへやむ

万人に知られたこの歌に、なお一・二の異見をさしはさむ余地があることを記して、後日の考に備えたい。

## 一 志我の大わだ・比良の大わだ

まず、第二句の異伝「一に云ふ比良の」とあるについて、諸注には二三の考え方が見受けられる。

(イ) これはさす所の物一なる上にいづれも道理なきことにあらねばいづれにてもあるべし。(講義)

講義は「大和太」を琵琶湖そのものと解釈しているところから、志賀の大和太と比良の大和太と両々「さす所の物一」と言うのである。しかし、大和太は大ワタ(大海)にあらざ大ワダ(大曲)であるとの通説に従うべきであろうから、この考えはその根拠を失うことになるであろう。

ちなみに「比良の大わだ」とは、雄松崎から木戸を経て南浜・和通川河口へかけての、南北はほ十軒にわたる弓状の曲汀に抱かれる湖面を言うものと考えられる。<sup>注1</sup>

(ロ) 比良は、琵琶湖の西岸の地名であるが、比良の大わだと呼ぶには適しない。これも本文の方がよい。(全註釈)

だが、現に万葉に「比良の大わだ」とある以上「適しない」とは言えないのではあるまいか。「わだ」はかならずしも袋状の湾入であることを要せず、弓状の曲浦であつてよいのであろう。

(ハ) 比良は都から距り過ぎてゐて、ふさはしくない。(全釈。金子評釈、注釈同旨)

おそらくこの見解が、一云の比良をすて、本文の志賀をよしとし、かつまたそれを大津湾と見なす通説を支えているものと思われる。

だが、第五句「会はめやも」の主格が「大わだ」であると見るのは後述のように解釈上の異見が可能であり、もしかりにそうだとしても、大津京の大宮人の行動範囲が大津湾あたりに限られていたわけでもあるまいから、人麻呂の心象風景の中で、昔の人に会うことを期待するものが比良の大わだであつたと見てもおかしくはないはずである。

さらにまた、この反歌が長歌および反歌一と同じ時と処、すなわち大津京の殿舎の址とその近傍の辛崎あたりで、いわば一気呵成に詠み出したのだとは決めてしまえないのではないか。性急な調査によれば、製作の時と処を異にする長歌と反歌とを組合わせたものにはつぎのような数例を見出し得る。

- (1) 過辛荷島<sup>二</sup>時山部宿称赤人<sup>一</sup>作歌一首并短歌(六・九四二~五)
- (2) 過敏馬浦<sup>二</sup>時山部宿称赤人<sup>一</sup>作歌一首并短歌(六・九四六~七)
- (3) 過敏馬浦<sup>二</sup>時作歌一首并短歌(六・一〇六五~七、田辺福麻呂歌集)

- (4) 巖旅歌一首并短歌(三・三八八~九、作者不詳、若宮年魚麻呂伝誦)

- (5) 石上乙麻呂卿配<sup>二</sup>土左国<sup>一</sup>之時歌三首并短歌(六・一〇一九、一〇二一、一〇二二、一〇二三、作者不詳)

(1)は、長歌が経過する地名(淡路の野島、印南端、辛荷島)を道行き風に叙し、反歌一・二とともに辛荷島付近の海上を過ぎつつある船上での作であるが、反歌三は辛荷島の東方約十杵の距離をへだてた都太の細江での停泊を歌うもので、時と処は前三首をさかのぼるものである。

(2)は、長歌が敏馬浦を歌い、反歌が須磨浦で囑目の海人を歌う。敏馬浦と須磨浦とは大和田泊・大和田浜をはさんで約十数杵をへだてている。

(3)は、長歌と反歌一とが敏馬浦、反歌二は大和太の浜を歌う。大和田浜は和田岬東方の曲浜、だいたい今の神戸港である。全註釈に「この歌によって敏馬の浦というのが、神戸港を意味していることがわかる。」とあるが、私はむしろ逆に、この歌によって両地名の指

すところを区別してもよいと思う。すなわち、先の(1)(2)の場合に同じく、いまま舟行の経過地一点が長歌と反歌に表わされているものであろう。大和田浜はおよそ和田岬から大和田泊へかけての範囲であり、その東方を劃して敏馬神社あたりを敏馬浦と見るのがよいと思う。

(4)は、長歌に淡路島の出帆を歌い、反歌にこぎ廻る敏馬の埼を歌う。これは海上約二十杵をへだてていよう。

(5)の、長歌一・二(一〇一九、一〇二〇~一)は大和在る人の作の体裁、長歌三(一〇二二)が恐の坂(紀の川添いの山、注釈等)、反歌(一〇二三)が大埼の神の小浜(和歌山県海草郡下津町)を歌う。乙麻呂配流の道行きぶりである。

右のように、時処を異にする長歌反歌の組合せが少数例ではあっても、全くないわけではないとすれば、問題の三一番歌第二句が長歌・反歌一の製作の場所(あるいは歌う対象となった場所)から十数杵をへだてた比良の大わだであったとしてもそれほど不都合はないことになろう。

ところで、比良の大わだは、先述のように滋賀郡志賀町を中心に雄松崎から和邇川河口へかけての南北約十杵の曲浦をさすものとすれば、実は「比良の」大わだはそれ自体「志賀の」大わだでもあったのである。先掲講義の説とはちがった意味で両伝「さす所の物一」なのではなかったか。

人麻呂歌の異伝が人麻呂自身において両案を存したのか、伝承の間の変化なのか、多くの場合たしかでない。巻一原本は人麻呂生存中に編まれたという伊藤博氏の説(「編者の意図」『国語国文』二九〇号)に従えば、今の場合人麻呂自身の推蔽の両案である蓋

然性が大きくもなるう。作者人麻呂にとって志質の大わだ・比良の大わだは同じ風景なのであって、両案はただシガノ・ヒラノという音調上のよしあしの問題だったのだとは考えられないだろうか。

澤瀉博士は「過<sub>三</sub>近江荒都<sub>二</sub>時作歌<sub>一</sub>」を「官命を帯びて東国又は北国へ使した折に通過した折」(注釈)の作品だとされた。思うに人麻呂は大津京の廢墟に佇立して彼れを見此れを見て一気呵成に長短三首を成したのではなかったのであろう。彼自らが大和をおき奈良山を越えてやってきて、廢墟をとぶらいます長歌の構想を得た。やがて湖畔辛崎に歩を移して反歌一を成し(あるいはここで船上の人となり)、北上して比良の大わだを眺望して反歌一を得た。そうして「昔の人にまたも逢はめやも」の詠嘆をうそぶかせつつ、東国あるいは北国への道を迎ったのではなかったらうか。<sup>注2</sup>

## 二 淀むとも

つぎには、第三句「よどむとも」の解釈を問題にしたい。まず「とも」についてはすでに落着したと思うが、念のためにかいつまんで記しておこう。すなわち、この「とも」を事実<sub>一</sub>に反する仮定条件とする解釈があった(拾穂抄、僻案抄、燈、攷證、美夫君志、講義総釈(武田氏)、金子評釈、作者別万葉集評釈(窪田氏)等)。

もと淀まぬ水にむかひてこそ、よどむといふ詮もあれ、もとより淀なるをよどむとはいふべき事にあらぬをや。(中略)この大和太の水はよどむ世なく、勢多のかたへ流るゝが故に、たとひ此水のよどむ世はありともと、もとよりあるまじき事を設ていふなり。古人にこの轍多し。「す多のまつ山浪も越なむ」などよめる類也。(燈)

金子評釈のみは同じく反事実仮定のともであるとしながら、「勢多のかたへ流るゝ」云々はとらず、「琵琶湖は流石に大潮で、岸辺の波は常に動揺して決して淀まない。」としている。これらに対して、このどもの仮定は「必ずしも現在の事実の反対であることを要しない」のであって「山川を中に隔りて遠くとも心を近くおもほせ吾妹」などと同様に、「現在淀んでゐる光景に対して『淀むとも』といふ表現を用ゐたもの」という柴生田稔氏の説があり(斎藤茂吉編『万葉集研究』下)、佐伯梅友博士はこれに賛成して修辭的の仮定と言われ(『淀むとも』考)、『万葉語研究』所収)、注釈また「急いでゐる人を見て『たとへ急ぐとも』といふ』の場合のそれだと説明される。

さて、どもの解釈・用法がこのように落着した上で一首の解釈がすべて定まったかというところではない。ともで接続される前後の「大わだ淀む」と、「昔の人にまたも会う」との間には、どんな意味の脈絡があるのか。この点で諸注をたずねてみると、相互に似通るところはありながら、やはりくいちがっている三通りの解釈が広く行われているのである。

- (1) 淀みて待つとも——代匠記「又」の釈、略解、檜孺手、新考、斎藤茂吉万葉秀歌、窪田評釈、大系、注釈、次田真幸講説等。  
湾内の水は淀みてゆきやらぬもの、行きやらぬものは物を待つ、<sup>つ</sup>如く思はるれば、シカ淀ミテ待ツトモ(新考。傍点筆者、以下同じ)

湖水の淀んでいる状態に人待ち顔なる印象を得て、これを昔の人にまたも会うことを期待する湖水の状態あるいは動作だと解くのである。玉の小琴「いつまで淀むとも」口訳「いつまで静かに淀んで

めようとも」などもこれにくみするのであろう。

(四) 昔ながらに、淀むとも——橋田東声氏評釈、落合京太郎氏(『万葉集研究』下)、万葉集精神の鑑賞、佐佐木氏評釈、私注等。昔ながらの志賀の入江の現実、対して人の移ろひ易きを嘆いて居る歌の意(落合氏)

昔の如く、変らずに、今も、淀んで居らうとも(私注)

この解釈は、淀んでいる湖水の状態に「昔ながら」の印象を受取るわけで、三〇番歌

ささなみの志賀の辛崎幸く、あれど、大宮人の船待ちかねつと同工異曲と見ることになる。

(イ) 昔ながらに、淀みて……待つとも——古義、柿本人麿評釈編、豊田八十代氏新釈、次田潤氏新講、全釈等。

昔盛なりし世のまゝに、淀みてあらむともその詮なき事なるに、もしなほ昔の人にあふ事もあらむかとて、待つ、あるらむ心の、いかにさぶしかるらむと、大和木をふかくあはれみたるなり。(古義)

昔ながらに水が淀んで、如何にも人を待ち顔であるが(新講)

この解釈は(四)の混交説のようでまぎらわしいが、やはり違う。湖水の淀んでいる状態を昔ながらの状態と認めて、さてその昔ながらの姿に「待つ、あるらむ心」を付度するのである。(イ)の解釈をふ

まえてさらに三〇番歌の発想に引きつけた解釈であると見える。(イ)とともに人待ち顔なる大わだをフカクアハレムふうの惻隱の情であるとする見方になる。

さて、諸注はこれら三様の解釈のどれかによって、平和的に共存していること奇異なほどであるが、もともとこうした幾通りかの解

釈を許すほどに、情緒の文脈は読者の鑑賞に委ねた、いわば心余りて詞たらぬ一首であるとも見受けられる。ところでここに、右三説とは似て非なる、かつ孤立してかえりみられない代匠記の解釈があった。

水ハ早く流レ過ル物ナカラ、大ワタニ入曲リテ、淀ムトモ昔ハ去テカヘリコヌ物ナレハ其世ノ人ニ又逢シヤ、又アハシト云也。

(精撰本。初稿本同旨)

人麻呂にはつぎのような作歌が有る。

もののふの八十字治川の網代木にいさよふ波の行方知らずも(三・二六四)

流れる水も網代木にいさよう、しかしそれもたまゆら行方も知らぬ嘆きとなる。また、明日香皇女の死を悼んで

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし一云水の与杼にかあらまし(二・一九七)

と歌っている。この歌の余意は、「流れて返らぬ水であっても、しがらみを渡して塞いたらばしはのどにもなれ、淀むこともあれ人の世は瞬時もとどまることがない。」というものである。人麻呂が水に対してこのような観念と情緒とを持っていたとしたならば、いま、満々とたたえて淀む志賀の大わだに見入って、

志賀の大わだにたたえた湖水は、たとえそのように淀みとどまろうとも、世の人は流れてとどまらず、近江京の人にまたも会うことはかなうまい。

という詠嘆を人麻呂が発したと理解することは十分自然であろうと思われる。

淀みとどまっていることは、その結果として昔ながらの姿を今に

とどめていることになる理屈であり、それが契沖の解説を先述(四)の解釈と紛らわしくさせ、結局契沖の見解が注意されることなくうもれてしまった理由かと思われるのであるが、視点の置きどころは両者全く別であることに注目したい。(四)は、湖水の状態に「昔ながら」との印象をうけとって解釈するものである。「淀む」そのことに思いをいたすのではない。(四)の解は「淀む」ことに「待つ」意を重ねるのである。前者は「幸くあれど」風の感傷であり、後者は湖水をフカクアハレム風の惻隱の情緒となる。契沖の解によれば、湖水の「淀む」そのことに思いを集めて、たとえ水は淀むことがあろうとも、人事は淀みとどまらぬものだという観念の表白の歌となる。湖水の淀みに寄せた一種の寄物陳思歌である。サキクアレドの感傷を脱し、湖水によせる惻隱の情を捨て、もつと人麻呂自身の日頃の人の世観・人間観に発し又それに帰る詠嘆でもって近江荒都歌一編は締めくくられることになるのである。こうして見ると、契沖説をことさら取りあげて通説の三解の前に置き、彼我比べつつあげつらう意味は決して小さくはあるまいと考えるのである。(一九七〇・九・二〇稿)

#### 注

1 湖畔から沖合を見渡すのも良い。湖上の観光船の舷側に寄り木戸あたりを過ぎるころ比良山系の影を落す湖水に見入るのも良い。むしろ狭隘な大津湾に比べて、比良の大わだはよほど広闊で、球面をなしてもり上るかのようなまさしく、大わだを実感することが出来る。

2 人麻呂歌集の歌はすべて人麻呂作歌とは言えないから不安ではあるが、参考までに高島で宿る歌(九・一六九〇、一六九一、比

良での旅(九一七一五、槐本歌)を思い合わせる事が出来る。3 これも参考として人麻呂歌集歌をあげることが出来る。

巻向の山辺とよみて往く、水の水泡の如し、世の人、我は(七・二二六九)

往く、水の過ぎに、い人の……(九・一一一九)

往く、水の過ぎに、い妹が……(九・一七九七)

宇治川の水泡さかまき往く、水のこと、返らずぞ……(十一・二四三〇)

いずれも流れて返らぬ水のイメージである。「その水でさえも淀むことはある。しかし世の人は……」という強調した表現が一九七番歌や問題の三一番歌だと言うことになるであろう。

(園田学園女子大学講師)